



年寄り噺



川崎ゆきお

古いものを捨て、新しいものに乗り換えた後、何となく不都合が起こり、それなら、以前使っていたものの方がよかったのではないかと、戻ってしまうことがある。ただし戻せるものに限られるが。

「ありますねえ。新製品に憧れて、買ったのですが、いかんですわ」

「いけないと」

「ものは進んでいるのですがね、不安定なんです。新機能も大したことはなくてねえ。それにそんな機能、一生使うようなものじゃなかったり」

「電化製品ですか」

「カメラやパソコンです。他の家電もそうですがね」

「しかし、古いタイプがよくて、それに馴染んでいても、もう売っていない場合があるでしょ」

「大ありですなあ。そんなもの店員に言っても知らないと言うしね。ついこの間まで、ずらりと並んでいたのにねえ」

「そういうとき、どうします。新しいのを買いますか」

「選択肢がないですから。古いのはもう売っていない。だから今風なのを買うしかない。そういうことです。ここでは自由度はないわけですからなあ」

「しかし、何十年も前の家電など、残っていますか」

「四十年前からある天井の蛍光灯なんかは、残ってますよ。これをLEDに変えたいのですが、根っこから変えないと駄目でしょ。これは工事が必要ですよ」

「その前は」

「その前」

「だから、蛍光灯になる前です」

「普通の電球でしたよ。今なら百円で売っているような球ですよ。それは子供の頃ですがね」

「その前は」

「そこまで古い家じゃないですが、田舎の実家に古いランプが残ってましたなあ。灯油でしょか」

「その前は皿に油を入れるやつでしょ。その前はローソクでしょ」

「ああ、そうですなあ、古いものが安定していると言っても、そこまで古いものは使えないですなあ」

「ローソクは今でも健在ですよ。停電したときとか。それに電気がいらないし、道具と言っても燭台があればいい」

「安定していますなあ、古いものは」

「しかし、ローソクや灯油から電気になったとき、便利になったんじゃないですかねえ。明る

いし。火をつけなくてもいいし。空気も汚さない」

「それが今はLEDですか」

「長持ちしますよ」

「でも、あの明かり、何か病院臭いです。栽培されているようで」

「まあ、裸電球の暖かさもいいですが、私はやはりローソクです。隙間風の状態なんかも分かりますからね。ゆらゆらと」

「御灯明でたまに付けることがありますかね。仏壇のローソクです。しかし、これもローソクのような形をした電球も出ていますなあ。あちらのほうが便利だ。まあ始終付けたり消したりするわけじゃないから、うちは亀山ローソクのままです」

「いや、ローソクも、あなたオシャレなものが出ていますよ。これは癒やし効果があるとかで、風呂場でそれを灯したりするらしいですぞ。絵柄入りでそれは綺麗なものです」

「レトロですなあ」

「いやいや、レトロという言葉そのものが、もはやレトロですよ」

「じゃ、いっそ懐古趣味といった方が安定しているかも」

「神社の祭りなんかで並んでいる提灯、あれも電球でしょ」

「それを言い出すときりがありませんよ。やはり便利な方を選ぶんですよ」

「はい」

「古代から続く儀式のようなものは別かもしれませんがね。これはお金がかかるでしょうなあ。衣装もポリエステル生地じゃだめでしょうからねえ。絹なんて高いですよ。留め具も樹脂じゃだめでしょうし、大昔のままを引き継ぐのは大変だと思いますよ」

「何かよく分かりませんが、古い馴染みのあるものが消えていくのは淋しい限りですよ」

「しかし、今風な新製品を買うとテンション上がったりしますよ。時代の恩恵もあるはずですからなあ」

「どうも年寄り臭い話になりました」

「年寄りじゃないですか」

「ああ、そうでした」

了